

探訪 北の風景 ②

日本一の菜の花畑 滝川市・江部乙

青木和弘

白い雪が残る暑寒別（しょかんべつ）の山並みを背景に、まぶしいほどあざやかな菜の花畑が広がる。丘陵を渡る風が黄色い花を揺すり、ミツバチが飛び交い、野鳥がさえずる。初夏の白い雲がゆっくり青空を渡ってゆく。のどかな田園風景に時を忘れて見入ってしまった。

日本一の栽培面積を誇る滝川市の菜の花畑は、江部乙（えべおつ）地区の丘陵地帯のあちこちに点在する。特に多いのは国道12号の東側で、丸加高原に向かう一帯だ。

この菜の花は観賞用ではなく、油の原料にな

る菜種を取るために栽培されているのだが、連作ができないから、畑の位置が毎年変わる。花の見ごろは5月下旬から6月上旬の2週間ほどだ。花の色は日を追うごとに濃くなるので、畑によって微妙に色合いが異なるという。

8月下旬から9月上旬に種をまき、1週間ほどで芽を出す。冬の間、雪の下で越冬し、雪解けを待って成長を始め、5月に花を付ける。菜種の収穫は、主茎の穂先から3分の1の部分の、さやの中の種子が5、6粒黒く変わってから、さらに2週間後で、7月下旬からだという。

江部乙地区の菜種栽培は、1989年（平成元年）から翌年にかけて滝川市で行われた北海道立植物遺伝資源センター現・道総研中央農業試験場遺伝資源部の栽培試験が切っ掛けになった。エルシン酸という人体に有害な脂肪酸を含まない「キザキノナタネ」という品種が北海道での優良品種に選ばれ、栽培が進んだ。99年ごろから栽培面積が増え、07年には青森県横浜町を抜き全国一の作付面積になった。現在は約200ヘクタールで、東京ドーム36個分に相当する広さだ。

菜種の作付けを後押ししたのは、小麦の連作障害を防ぐ輪作作物に適していたことや、貴重な非遺伝子組み換え菜種であることから、生活クラブ

生協向けの契約栽培が行われるようになったことなどが挙げられる。

菜種は優れたものだ。秋まき小麦の後作として植え付けができ、収穫後の茎や葉を畑にすき込むと良質な肥料になる。根の量が多いので土壌を柔らかくし、水はけもよくする。経済性が比較的高く、景観作物として地域経済への貢献度も高い。

そんな菜種も、50年代に国内自給率が100%だったが、輸入自由化で価格競争に負け、いまは0.04%にすぎない。

滝川の菜種生産は10アール当たり3000キログラムを超える高い収量を誇るが、独自の販路開拓と、生産・加工・販売を自ら行う6次産業化の取



菜の花まつりの会場をのんびりトラクターで巡る参加者



青空の下、一面に広がる日本一の菜の花畑（写真はいずれも滝川市提供）



たきかわ菜の花まつりの会場で販売される人気の名産品

り組みによって作付けを増やし、日本一の菜の花畑の景観をつくり出したといえる。

米やタマネギ、リンゴ、ジンギスカンに加え、「なたね油」や「菜の花オノンソース」、菜種かすを肥料につかった「菜の花米」、春一番に採れる野菜の「なばな」などが滝川の特産品になった。

菜の花観光も年々入り込み客が増えている。今年の「菜の花ウィーク」は5月31日（土）から6月8日（日）で、場所は滝川市江部乙町丸加高原丘陵地一帯。「2014たきかわ菜の花まつり」は5月31日（土）と6月1日（日）に「丸加高原伝習館」で開かれる。

札幌市内から車で1時間半ほど。ぜひ、田園の美しい風景を堪能してもらいたい。